

意思決定支援のやりがい ～目の前の人の人生を変える?!～

熊本保健科学大学看護学科 松本佳代

ここ数年で、医療や介護、福祉の場でも「意思決定支援」「アドバンス・ケア・プランニング」という言葉がよく聞かれるようになりました。

私は、大学で看護教員をするかたわら、意思決定支援について学ばせていただき、「認知症や障がいがあってもなくても、誰もが自分らしく自分のことを決められる社会づくり」を目標に、ワークショップ開催や研究活動に取り組んでいます。



私が看護師をしていた15年ほど前。ご家族の希望で患者さんへ病名告知をしないまま治療方針を決めたり、余命についてお知らせしないまま亡くなられたりすることがありました。

そのたびに私は、「私だったら、自分のことは全部知っておきたい。あとどれくらい生きられるのか知って、残りの時間をどうするか考えたいし、やりたいことをしたいのに」と思っていました。

また、高齢の患者さんが、リスクの高い手術を選択した結果、術後合併症で命を落とされる場面にも出会いました。その時、「この患者さんは、手術をするとどうなるか理解したうえで手術を選ばれたのだろうか。私は、手術のインフォームドコンセント(説明と同意)で、看護師としての役割を果たせていたのだろうか」と、とても苦しくなりました。その時の患者さんへの申し訳なかったという思いが、現在の原動力になっているように思います。



私たち専門職が、「A という治療やケアを選択した場合、どんな効果や副作用が予想されるか」「B を選択するとどうなるのか」など、知識や経験から分かっていることも、対象の方やご家族がどう理解しているかはわかりません。私自身、家族に説明をしても、「えっ、そんなふうに理解したの!？」と驚くことがあります。

わかりやすい言葉で伝え、ご本人やご家族がどう受け止めているのか確認しながら、納得いく選択ができるようサポートしていくのは、時間もエネルギーもいりますが、その方が自分らしい生活を送るための重要なプロセスだと思います。

私がモットーにしている言葉をご紹介します。「話し合うプロセスにおいて、本人は自分の人生や生活に不可欠な人やもの、生きがいなどについて振り返る機会を得る。そのなかで自分の望む生き方を自分自身で再確認し…(中略)…自分の意向をもとに生活を組み立てることが可能となり、生活へのコントロール感をもつことができる。本人の意向に沿った医療やケアの選択は、最期まで尊厳ある生を自分らしく生きることにつながる¹⁾」。

みなさんが取り組まれている治療やケア、ケアマネジメントなどでの話し合いの1つ1つが、目の前の方の人生の質を大きく向上しているのですね。

ご多忙な中、一人ひとりに向き合い意思決定のプロセスを支えていくことは本当に大変だと思いますが、どうかこれからもお力添えをよろしくお願いいたします。



引用文献: 1)西川満則他 編:『本人の意思を尊重する意思決定支援』
南山堂,2018, A-1)アドバンス・ケア・プランニングの定義(片山陽子著), p4

次は熊本保健科学大学 澤崎先生へリレーします。